

利益追わぬ投資を

世界的な金融危機が激震を与えた08年。その空風はアジアでも吹き荒れました。貧困問題の解決に取り組んできたバンラデシュの経済学者ムハマド・ユヌス氏(78) (8頁)



Muhammad Yunus 経済学者。グラミン銀行総裁。40年、英領インド北東部のチッタゴン(現在のバングラデシュの第2の都市)生まれ。60年代に奨学金を得て米国に留学。70年に米バンダービルト大で経済学博士号を取得後に帰国し、チッタゴン大経済学部長に。76年に貧しい人々の自立を促す手法として、マイクロクレジットを考案。83年にグラミン(農村)銀行を設立して、活動を全国に広げた。06年にノーベル平和賞受賞。新著に「貧困のない世界を創る」(日本語訳、早川書房)。68歳。

グラミン銀行ムハマド・ユヌス総裁に聞く

二一面参照

■金融危機に学ぶ
08年の最も大きな出来事の一つが金融危機でした。金融危機は、私たちが金融の世界を、完全に理解していないからこそ示された。市場は最高で「見えざる手」がすべて解決してくれる、と信じ込まされていた。金融市場をカジノのように使い、実体的なものを使っていた。

- ユヌス氏の発言骨子
- ①金融危機の原因は市場への過度な信頼
 - ②金融危機の最大の被害者は30億人の貧困層
 - ③食糧・エネルギー・環境危機も忘れるな
 - ④誰も分け前を取れるグローバル化を
 - ⑤社会貢献目的の新企業モデルを市場に
 - ⑥アジアの「無私」の伝統は危機の時代に生かせる

一握りの金持ちが起した危機で生活が直接打撃を受けたのは、工場が閉鎖し、職を失った世界に30億人いる庶民の人々だ。今巨額の企業救済を議論しているが、職を失った貧しい人々の救済策を話し合っている場所はない。皮肉なことだ。ここで触れないといけないのは、金融危機は08年の様々な危機の一つ、というところだ。食糧危機も起きた。エネルギー危機もあった。高騰した石油価格は収まらなかった。問題は増え続けている。以前から環境危機も続いている。これらの危機は関連し合っている。私たちが全体のシステムを再設計しなければならぬ。い。今やらなければいけない。これからの危機に関連するグローバル化や自由市場に

ついて、どう考えますか
グローバル化は、だれかが設計したもではない。人類の登場以来、常に人の移動はあった。その過程は変えられない。問わなければならないのは、正しいグローバル化か、誤ったグローバル化か、ということ。強く豊かな者がすべてを取り、弱く小さい者は何も手に入らないのではなく、公平に分け前を取れるようにすべきだ。「マネーパワ―」ですべてを分捕るのはよくない。誰もが自分の場所を確保できる。それがグローバル化の正しい精神だ。自由市場は良いことだ。でも、私たちは市場を誤って使っている。金融制度をただす前に、それを生んだ資本主義をたまたすべきだ。私たちは資

本主義を誤って解釈している

ここで、ビジネスとは金もうけの使命と言った。この解釈は人間を金もうけの機械と見なす誤った解釈だと思ふ。

満足感を求めて

すべての人間には利己的な面と、無私で献身的な面がある。私たちは利己的な部分だけに基づいて、ビジネスの世界を作った。無私の部分も市場に持ち込めば、資本主義は完成する。私はそれを「ソーシャル・ビジネス」(社会的企業)と呼ぶ。投資家は特定の社会問題の取り組みに投資する。社会的企業は損失も配当もない、社会に貢献する目的を持つ会社だ。貧困層の消費健康、貧しい人の住居問題との関連は

題、環境問題など様々な事柄に取り組める。私たちは、フランスの乳製品会社ダノンと「グラミン・ダノン」という会社を設立した。栄養価の高いヨーグルトを生産し、栄養不足の子供たちに低価格で売っている。目的は金もうけではなく、栄養不足の解消だ。バングラにはヒョウの汚染水の問題がある。飲料水の問題に取り組み「グラミン・ベオリア」という会社も設立した。その仕組みは投資した金は、可能な期間で会社に元金を返済してもらふ。利益を生むかもしれないが配当を受けない。金融的利益でなく、安全な水の提供で満足感を得られるからだ。利益はビジネスの使命、拡大に使う。ダノンもベオリアも自ら利益を取らない。私たちがこの条件で合意した。配当なしで、投資家の関心が集まるでしょうか。考え直してほしい。従来の慈善事業への寄付の代わりに、新しい会社を立ち上げてみては、と言っているのだ。社会で納めできないことがある。変えたいと思えば、デモをする。警察が阻むかもしれない。それでもデモをすれば、「無私」が響くからだ。そういう心が社会的企業を生む。あなたが考案したマイクロクレジット(少額融資)との関連は

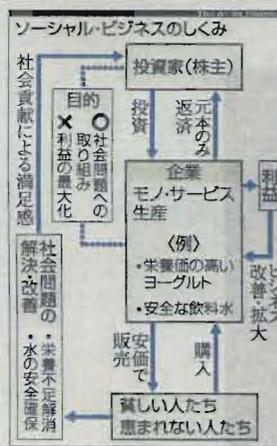
■「無私」残るアジア
中国やインドが台頭していき、従来の路線で進んで場合、両国の貧困は解消できずか
両国とも利的に貧困を減らしている。グローバル化と利益の最大化を目指す経済が、貧困問題にも効果があるということだ。しかし、世界で最も豊かな米国には貧しい人々がいて、実に4700万人が医療保険を利用できないと伝えられている。保険が民間企業によるものだからだ。民間経済は、貧しい人々を放置してしまっている。自給自足が助け合いなどの伝統をどう生かせるでしょうか
アジアでは、若い労働者の面倒を見るなど「無私」(ヘルフレスネス)の伝統が欧米より残っている。家族は社会の最小の単位で、そこから地域社会への貢献を感じ、人生をささげたいと思う。この伝統は、経済の世界では社会的企業の創設で表現できる。
日本への期待は
フランスの人々が社会的企業を始めたが、日本人々も重要な役割を果たせる。利益の最大化を夢見る眼鏡を外し、社会的企業の眼鏡をかけてみてはどうか。世界が全く違って見えるだろう。日本企業には社会貢献の基金がある。それを慈善事業の代わりに使う。

週刊 アジア

新年特集号

マイクロクレジット(少額融資) 既存の銀行が融資しない貧困層を対象に無担保で少額を貸し付ける制度。貧しい人々が、起業し、貧困から脱することを目的とする。マイクロファイナンスとも呼ばれる。ユヌス氏が76年に始め、世界100カ国以上で実施されている。

グラミン・ダノン バングラ農村部の子供たちの栄養不足解消を目指し、グラミン銀行グループと乳製品の大大手ダノンを共同出資して08年3月に設立。現在9万7千人を対象に栄養価の高いヨーグルトを1パック5タカ(約7円)で提供している。



社会貢献による満足感